

Hukutana

No. 10 (May 1999)

The Bulletin of
Japan Society for the Promotion of Science,
Research Station, Nairobi



ふくたーな

第10号 (1999年5月)

日本学術振興会
ナイロビ研究連絡センター
ニューズレター

久保利夫 1 最近のマラリア犠牲者、予防法
KUBO Toshio Recent Malaria Protection and Victims

4 センター往来
Visitors

5 センター行事
Meetings, News

平田浩司・長谷川明子 5 はじめまして Hujambo?
HIRATA Koji, HASEGAWA Akiko Self Introductions

6 業務案内・センター雑報・編集後記
Announce, Miscelanea, Editor's Note

最新情報

最近のマラリア犠牲者、予防法

久保 利夫

在ケニア大使館医務官

(1999年6月3日執筆)

外務省員の犠牲者

つい先週のこと、東京の外務省診療所長から電話があった。省員がマラリアにかかり死亡した、対策を含めてコメントしてほしいとの内容。その直後、詳しい病歴などが送られてきた。それによれば、T氏は三十歳代の元気な事務官であったが、フィリピンのパラワン島へ八泊の休暇旅行にでかけ、熱帯熱マラリアに罹患し、発病後帰国し、浦和市立病院に入院、その後、万全を期して、マラリア治療部門を有する都立駒込病院へ転院し、我が国のマラリア医学の第一人者である大学教授のご指示を仰ぎながら治療を続けたが、容態急変し鬼籍に入ったというもの。国内で、マラリアについて豊富な知識を持った医師を多数抱えているのは我が外務省の医務官集団である。そのお膝元において、マラリアの犠牲者が出た事は、残念至極である。筆者も責任を感じている。T氏の事例から、

- (1) マラリア予防薬をのんでいなかった
- (2) マラリアと診断が付くのが遅れた
- (3) その結果、マラリア治療が発病後六日目になってやっと始められたが、もう手の施しようがないほど病気は進んでいた

といった反省点を列挙する事ができる。

在ケニア日本人の脳マラリア

この電話があった翌日、今度はケニア西部の主要都市キスムのアガ・カーン病院に日本人女性のYさんが深夜かつぎ込まれたという知らせが入った。当初は栄養失調で倒れたらしいといったことしかわからなかったが、直接、そこの看護婦や医師と連絡したところ、病気はマラリアであり、血液の中のマラリア原虫の数はプラス2である、尿の排泄も悪く、腎臓も弱っているという。意識がなく、水も飲めない状態なので、治療には注射液の抗マラリア薬を毎日筋肉注射し病状は少しずつ改善しつつあるという。Yさんはキスム市でボランティアをされていたNGO活動家である。大使館への第一報は、メイドからの電話であった。順調な回復を祈っていたが、本日キスムの病院へ電話したところ「当のご本人が電話口に出るから待て」という。「それほど回復したのだな」と筆者は期待して待った。ところがである、電話口に現れたYさんは、明らかな言語障害とわかるスローペースの話しぶりであり「今日は、何月何日ですか?」という問いかけにも答えられなかった。これは脳マラリアのため、脳への無酸素状態が続き障害を引き起こした可能性が高いと判断せざるを得なかった。Yさんの速やかな回復を祈るのみで

Milima haikutani, lakini binadamu hukutana
山と山は出会わないが、人は会うものだ (スワヒリ語のことわざ)
Mountains never meet, but human beings do - Swahili proverb

ある。Yさんの場合も、マラリア予防の一般的指導とくに

- (1) 予防薬を飲んでいたのか？
- (2) なぜもっと早くマラリアを疑って病院で診断と治療を受けなかったのか？

といった疑問が残る。

上記の二人のマラリア犠牲者は、ここ10日間の出来事である。過去において犠牲者がでるたびに、このような惨事を繰り返さないために、どうすれば良いのだろうかかと誰しもが考え、提言などを新聞紙上や学術誌上に掲載したものだ。しかし悲劇は繰り返す。あるべきでないことが、繰り返して起こっている現実を目の当たりにして無力感におそわれそうになる。だがここであきらめてはならない。マラリアは予防することができる病気であるという事もまた真実である。そして、マラリアの予防に成功した事例もあるのである。成功例から学ぶ事ができる。

マグロ漁船の事例

暮れも押し迫った1994年の12月、大西洋の漁場でマグロを捕っていた漁船の船員Sさんが洋上で死亡するという悲劇が発生した。筆者は、死因はマラリアと直感し遺体の解剖を指示した。直感は当たり、Sさんの脳の血管にマラリアの原虫が充満しているのが顕微鏡下に証明された。簡単に経過を述べると、Sさんの船は、補給と休養をかねて、象牙海岸の港町アビジャンに寄港した。Sさんは仲間と一緒にアビジャンへ上陸し夜のレストランで夕食をとり「ハマダラカ」に刺された。船は、Sさんらに乗せて再び大西洋の漁場へと向かいマグロを捕っていたが、十数日の潜伏期間を経た後、Sさんはマラリアを発病し死亡した。発病から死亡まで付き添った船の仲間や、衛星通信で病状を逐一受信した宮城県にある船の母港の総合病院の医師の誰一人としてSさんがマラリアにかかっていたことに気が付いた者はいなかった。遺体が解剖されていなかったら、Sさんは、口から泡を吹いて死亡したので、「てんかん発作によって死亡した」などと死亡診断書に記載されたであろう。これは筆者にとり忘れることのできない衝撃的なマラリアとの出会いであった。Sさんの脳の標本は今も大切な医学標本として手元に保存されている。その標本を見るたびに、二度とこのような犠牲者を出してはならないと心に言い聞かせてきた。そしてささやかな予防活動として「アビジャンのマラリア事情」と銘打ったパンフレットを作成して、マグロ漁船が寄港するケープタウンとラス・パルマス

(カナリア諸島)の日本鯷漁業組合連合会の事務所に配布した(このパンフレットは、広く関係者の間で読まれインターネットのホームページや地方の医学予防協会の月刊誌にも転載されるなどマラリア予防に役立っているようである)。今日、大西洋上で操業する日本漁船にはマラリアの予防薬と治療薬が常備されるようになり、その後、マラリアで船員さんが死亡したという話は聞かない。これは、団体組織としてマラリア予防に取り組み成功した一例である。Sさんの貴い犠牲が教訓として生かされた。今後も、船員さんの「マラリア死ゼロ」が続くことを祈る。

「災害は忘れたころにやってくる」「マラリアも忘れた頃にやってくる」機会あるごとにマラリアの怖さを広く国民に報道し、マラリアへの警戒心を高く維持しなければならない。もっとも卑しむべき行為は、マラリアの犠牲者が発生したとき、それを報道せず、「くさいものにはふた」と隠蔽することである。これは病気の予防を生業とする我々医師にとって許すことのできない犯罪行為である。

犯犯と防マラリアの共通点

次に、視点を変えてマラリア予防について述べてみよう。海外旅行における「犯犯」と「防マラリア」は似たところがある。治安大国の日本から海外に出て、犯罪の被害に遭う日本人が多い。マラリアのない日本から、マラリアの流行地へ旅行してマラリアにかかる日本人が出る。両者に共通するのは、無知である。警戒心の無さである。犯罪やマラリアの多い地域へ行く事はできるだけ避けるべきであるが、どうしても行かなければならないときは、それなりの予防心を持って行くべきである。その予防心とは、

- (1) 夜間の外出は避ける
- (2) 防衛を強くする: 単独行動をしない、予防薬を飲むなど
- (3) 危険な目にあったら生命の安全を第一に優先させる。怪我と病気にはとにかく病院へ直行するなどである。

ケニアの危険度

米国海兵隊のクーパー大佐が提案した、「クーパーの色」という戦場における危険度分類がある。安全地帯が「白」、ある程度の危険が「黄」、かなりの危険が「ピンク」、非常に危険が「赤」、死に直面しているが「黒」。

今日、我々が住むナイロビの治安は、昼間でもピン

ク、夜間は赤である。マラリアについては、ナイロビの夜はピンク、モンバサやキスムの夜は赤と分類することができる。ピンクや赤に要注意、「君子危うきに近寄らず」である。こうなるとマラリアへの警戒は性病やエイズの予防と重複する。

旅行者は、目的地の危険度について十分な情報を事前に入手しよう。「備えあれば憂いなし」マラリアの薬を持参して旅行しよう。

対マラリア必需品

最後に、防マラリア必需品について述べよう。蚊よけのクリームや蚊帳。そして予防薬、これはメフロキンとドキシサイクリンのうちの何れかを採用する。クロロキンとバルドリンの併用はききめがわるくなったのでお勧めできない。万一に備えて治療薬。これはアルテナムかコテキシンのいずれかとドキシサイクリンの併用とする。さらに、最近発売されたマラリア診断キット。これは耳たぶを針で刺し、数滴の血液をキットの濾紙に滴下し試薬を浸透させ黒い線が決まった場所にできればマラリア陽性と判定できる。携帯用のキットは25回分の検査ができる。

マラリア最新ニュース:

1. Tafenoquineという予防薬が新しく登場しようとしている。これはプリマキンという従来からあった抗マラリア薬を改良した薬で、予防内服の最終日はマ

ラリア流行地の最後の日まで内服すればよい。今の予防薬のように、流行地を離れてからも4週間飲み続ける必要はない。

2. アジスロマイシンという抗生物質がマラリア予防薬として使えるのではないかといわれたが、その後の研究調査の結果、効果がドキシサイクリンに劣る事が判明した。ドキシサイクリンの予防薬としての地位が高まった

3. 上述のマラリア診断キットを用いて、エジプトの7体のミイラ (3200 B.C. - 700 B.C.) とヌビアの11体のミイラ (A.D.350 - A.D.550) から得た皮膚、筋肉、肺臓などの組織片を対象に、熱帯熱マラリアの抗体を検査したところ、エジプトのミイラの6体、ヌビアのミイラの1体から抗体の存在が証明された。これらのミイラの死因は熱帯熱マラリアであったわけである。対照群として用いた、南米のチリのミイラ (1375 B.C.) は抗体を持っていなかった。マラリアは古い古い病気である。古免疫学の今後の発展に期待したい。

4. 北朝鮮のマラリア: 朝鮮動乱時、国連軍は予防薬を使った。今日でもマラリアは流行している。学術調査、援助関係で渡航する人は注意しよう。

おわりに: マラリアを予防しよう、個人として、また団体や業界などの組織として。マラリア情報の公開、予防治療薬の自己内服という自衛。そして、究極の予防法は、マラリア猖獗地への旅行をとりやめること。



Recent Malaria Protection and Victims

KUBO Toshio (*Embassy of Japan*)

An officer of the Japanese Ministry of Foreign Affairs died from malaria last week in Japan. He was infected in Philippines. Later on, I heard a Japanese woman in Kisumu, Western Kenya, is suffering from a cerebral malaria. These two cases tell us that we should protect against malaria. One, by taking anti-malarial medicines, and the other by consulting a doctor immediately when we feel ill.

There was a case study in Abidjan, Cote d'Ivoire, in conjunction with the tuna fishery association. One fisherman died on the Atlantic Ocean, and no one had noticed he had malaria, we only realized after his autopsy was done. Since then

they have carried anti-malaria medicines in their ships, and have not had any malaria patient since.

Three keys protect us against malaria: First is not to go out during the night, second is tough protection, the last is to go to hospital immediately. In Kenya, we are in the danger of malaria infection. The best way is not to go to the areas polluted by malaria.

Mosquito nets, anti-malarial medicines (Mefloquine or Doxycycline for protection and Doxycycline with Artenam or with Cotecxin for cure) and malaria diagnostic kits are the necessities.



English summary by the Editor

センター往来 Visitors

4月 April

- 7 Simon G. Mathenge (University of Nairobi)
 8 江原憲一 EHARA Ken'ichi (法政大学大学院 Hosei University)
 濱田憲一 HAMADA Ken'ichi
 13 F. M. Ndege (University of Nairobi)
 13 R. M. Kariba (University of Nairobi)
 16 Bro. Timothy Adera (St. Mulumba)
 20 J. W. Kiringe (University of Nairobi)
 23 Onedo Misama, Ronald Mungusa
 28 Simon Gatheru (National Museums of Kenya)
 29 大倉三和 OKURA Miwa (立命館大学大学院 Ritsumeikan University)
 29 平田浩司 HIRATA Koji (Makerere University)
 30 Augustin K. Basabose (CRSN Lwiro Primatology, Zaire)
 Kasaza Gurhabe (CRSN)
 Emmanuel Bitsibu (CRSN)

5月 May

- 3 Stephen Gitonga
 3 Beatrice Khamati Njega
 3 中村香子 NAKAMURA Kyoko (京都大学 Kyoto University)
 4 前川浩 MAEGAWA Hiroshi (日本学術振興会国際情報課次長 JSPS Tokyo)
 水井義武 MIZUT Yoshitake (同研究推進課次長 JSPS Tokyo)
 4 木村李花子 KIMURA Rikako (馬の博物館 Equine Museum of Japan)
 石山勝敏 ISHIYAMA Katsutoshi (写真家 Photographer)
 田中理映子 TANAKA Rieko (名古屋大学大学院 Nagoya University)
 長谷川明子 HASEGAWA Akiko (名古屋大学 Nagoya University)
 4 Wambugu Joseph Maina
 10 Humphrey J. Ojwang (University of Nairobi)
 10 皆川界 MINAKAWA Noboru
 (国際昆虫生理生態学センター International Centre of Insect Physiology and Ecology)
 12 Wanzala Wycliffe (University of Nairobi)
 12 Kaima D. M. Ruiga
 21 Perinah A. Aloo (Aquatic Research Centre)
 24 Kiragu Kibe F. (Institute for African Studies, University of Nairobi)
 26 Mike Huffman (京都大学 Kyoto University)
 27 Elkalale Gabriel (National Museums of Kenya)
 31 Fredrick Karamja (National Museums of Kenya)
 31 足達太郎 ADATI Tarô
 (国際昆虫生理生態学センター International Centre of Insect Physiology and Ecology)

センター行事 Meetings, News

3月末：IAS (Institute for African Studies, University of Nairobi) の所長交代。(Ph.D) Simiyu Wandibba 氏から(Ph.D) Collette A. Suda 女史へ。4月6日：足達太郎前派遣研究員・巻島美幸派遣研究員、センター業務説明のため IAS 訪問

3月下旬：NCST (National Council of Science and Technologies) より 1st National Workshop for Stakeholders in Science and Technology (S & T) for Development の開催の案内 (のち、6月上旬に延期)

4月11日：現地職員5名の雇用契約を更新 (Alloys Opanga, Christine Mburu, Edda Musinde, Fanuel Musinde, Mariko Opanga)

5月3日：日本学術振興会東京本部より前川浩次長・水井義武次長、ナイロビ研究連絡センター視察のためボン経由で到着。4日：ケニア国立博物館を表敬訪問、昆虫標本庫・展示室・植物園を見学。5日：ICIPE 訪問、実験施設など見学 (6日帰国)

5月25日：NCSTの書記 (Secretary)、(Ph.D) George K. King'orah 氏とケニア・日本の学術交流の促進について協議

5月31日：日本大使館久保利夫医務官と組織的なマラリア予防について協議

5月31日：日本大使館広報文化センター小林伸嘉氏とケニアでの日本の学術文化の広報活動について協議

はじめまして Hujambo? Self Introduction

長谷川明子 (名古屋大学) HASEGAWA Akiko, Nagoya University

余りに広大な大地を見間違えて「海だ!」と叫んでから、はや8年。3回目の渡航にも関わらず、ケニア山の眼下一面に広がるベルベットの絨毯のような畑、そして調査地であったサンプルの小高い山に囲まれた荒涼とした大地…など、私の知らないケニアに出会いました。訪れる度に新しい発見があるケニアは、まさにワンダーランド。

専門学校時代の職員時代、何度も仕事でケニアを訪れ「次は動物の調査員としてケニアに来たい!」と願っていた

ただけに、ナイロビの学術振興会で調査許可証を手渡された時には、本当に嬉しく、嬉しくて・・・

1日の成果を温かいケニアの人々と分かち合い、そして今回覚えたスワヒリ語 "Bia kunywa moja moja baridi!" それはまるで、魔法のように幸せを運んで来てくれました。そして、今でもその呪文を唱え、ケニアの充実した日々が甦って来るのです。またいつか、ケニアの大地に立てる事を夢見て・・・

皆様のアフリカでの御活躍祈っております。

平田浩司 (総合研究大学院大学/Makerere University) HIRATA Koji

マケレレ大学の研究機関である Makerere Institute of Social Research (MISR) の Research Fellow です。ウガンダの王国の社会、政治、文化についての社会人類学的な調査を行っています。なかでもブニョロ・キタラ王国に関心があります。日本では、国立民族学博物館を研究基盤施設とする総合研究大学院大学の文化科学研究科博士後期課程に在籍していますが、現在は休学しています。指導教官は国立民族学博物館/総合研究

大学院大学の栗本英世助教授、吉田憲司助教授です。調査期間は1999年3月から2001年3月を予定しています。ウガンダにお越しのさいには、ぜひともご連絡ください。連絡先は以下のとおりです。

e-mail: cbr@imul.com (Subject の欄に HIRATA, Koji とお書きください) Tel: カンバラ530748 Post: Poste Restante, Kampala, UGANDA

業務案内

大使館の久保先生の記事にもあるように、マラリアは予防できる感染症です。最新の情報と対策で、貴重なアフリカ滞在を無駄にすることのないよう、ナイロビ研究センターでは、研究支援の一環として、マラリア予防薬・治療薬を用意しています。

マラリア対策

現在、予防薬として Mephloquine (商品名 Mephaquin, Lariam と同等) と Doxycycline (商品名 Doxylin)、治療薬として Dehydroartemisinin (商品名 Cotecxin) を常備して、随時お分けしております。ナイロビに入られたとき、調査地に

入られる前などにお申しつけください。特に Mephaquin は市中で購入すると非常に高価です。

治療薬の手に入りにくい日本に備える、帰国キットも用意しております。

センター雑報 Miscelanea

- 4月2日: 暴風雨による倒木を撤去
- 5月11日: 4月より継続の老木の伐採完了
- 5月13日: 3月より継続の塀の嵩上、門扉の改修工事完了
- 5月27日: 番犬ジル3頭出産、1頭は翌日死亡
- 5月28日: 番犬最長老ベス(♀)死去、享年13歳

編集後記

◇段組み導入の単独編集の第1号◇ナイロビを離任なさる大使館の久保医務官にマラリアの最新事情をお願いしました◇最近も1週間に3人の日本人マラリア患者が出たとのこと◇「初めまして」の長谷川さんはシマウマ行動研究での短期滞在、重症の「ケニア病」◇平田さんは Pearl of Africa の美称を持つ Kampala に在住◇7月下旬にはシニアの作道信介さん(弘前大学)が着任予定です(巻)

6

Hukutana No. 10

Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi
Issued: 31st may 1999; Editor: MAKISHIMA, Haruyuki
Publisher: JSPS Research Station, Nairobi
Printer: Jarolin Enterprises, Nairobi

For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The views expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors and do not necessary reflect the views of Japan Society for the Promotion of Science.

ふくたーな◇第10号

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース
発行日◇1999年5月31日 | 編集・発行者◇巻島美幸
発行所◇日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主要・意見は執筆者個人のものです。

© 1999 Japan Society for the Promotion of Science, Research Station, Nairobi. All rights reserved.

P. O. Box 14958, Nairobi, KENYA Phone: +254-2-442424; Fax: +254-2-442112; e-mail: jsp@swiftkenya.com

Japan Society for the Promotion of Science,
Nairobi Research Station
P. O. Box 14958
Nairobi, KENYA

**PAR AVION
VIA AIR MAIL**